

作物名：キャベツ

病害虫名：黒腐病（病原：*Xanthomonas campestris* pv. *campestris*）



下葉の発病



V字型の病斑

### 1 被害の特徴と診断のポイント

- ・生育中全期間を通じて、葉、茎、葉柄に発生する。
- ・苗床で発芽直後の幼苗に発生した場合には、子葉頂部のへこんだ部位から発病し始め、子葉は枯れる。
- ・本ぽでは、主に下葉から発生し、葉縁に葉脈を中心として外側に広がるV字型の黄色の病斑を生ずる。病斑が拡大すると病斑内の葉脈は暗紫色となり、病斑部は古くなると枯死して乾燥し破れる。
- ・結球葉では球頭に淡黒色の病斑ができ、病斑部の葉脈は紫黒色に変色する。
- ・被害が激しい場合は地際の茎が侵され、導管部は黒変する。

### 2 伝染源及び伝染方法

- ・本病菌は被害茎葉とともに土中で越冬して伝染源となる。また、アブラナ科雑草上でも越冬する。
- ・感染は本病菌が降雨による雨滴の跳ね上がりとともに葉に付着し、葉のへりの水孔や付傷部から侵入することで起こる。侵入した菌は、導管を伝って組織に広がり、4～6日後には病斑が現れる。
- ・被害植物の病斑上の菌が風雨により飛散し、二次伝染を引き起こす。
- ・本病菌は種皮に潜入又は付着して、種子伝染する場合があるが、本ぽでの発生は土壌伝染による場合が多い。

### 3 発病・伝染好適条件

- ・本病菌は細菌の一種で、グラム陰性の好気性菌である。培地上では淡黄色の円形又は不整形のコロニーをつくる。
- ・菌の生育適温は30～32℃で、死滅温度は51℃で10分である。乾燥に極めて強く、土壌中では1年以上生存する。
- ・発病適温は15～30℃であり、特に5～6月、9～10月に発生が多い。
- ・本病菌はブロッコリー、カリフラワー、だいこん、はくさい等のその他アブラナ科野菜も侵す。

### 4 防除対策

- ・被害残渣はほ場に放置すると翌年の強力な伝染源となるので、ほ場外に持ち出し土中深くに埋設する。
- ・各種アブラナ科野菜が罹病性のため、常発地では2年以上アブラナ科以外の作物を栽培する。
- ・品種によって発病差が大きいので、常発地では耐病性品種を導入する。
- ・定植15～45日後の間に3回程度予防的に薬剤散布を行う。また、発病を認めた場合は速やかに薬剤散布を行う。
- ・台風や長雨等の多発しやすい天候の後には、速やかに薬剤散布を行う。
- ・キスジノミハムシなどの害虫による食害痕も病原菌の侵入口となるので、害虫防除も徹底する。

### 5 出典

- (1) 参考文献：日本植物病害大辞典（全国農村教育協会）、農業総覧原色病害虫診断防除編3-①（農文協）、農業総覧病害虫防除・資材編3（農文協）
- (2) 写真：宮城県病害虫防除所撮影